

出村みや子氏の『聖書解釈者オリゲネス——復活をめぐる論争を中心として』は、オリゲネスを中心に長くキリスト教教父思想を研究してきた著者が、これまでの成果を凝縮して、彼のキリスト教思想家としての特徴を「聖書解釈者」という視点から捉え、その営為の思想史上の意義を明らかにした優れた論文である。

オリゲネス(185-253)は古代キリスト教の最大の神学者の一人だが、正統教義確立以前に活動した彼の思想については、その論述の多面性、また六世紀に彼の教説とされるものが異端とされたこともあって、さまざまな理解がなされてきた。聖書を恣意的に解釈してグノーシス主義にも通ずる新プラトン主義的な宗教的・哲学的世界観を構築した思想家と見られることもあった。が、出村氏は、二十世紀中葉以降に本格化した原典研究、および近年の研究動向を十分に咀嚼した上で、神学者オリゲネスの本領を「聖書による聖書解釈者」として提示する。その聖書釈義は、先行するフィロン、クレメンスらのいわゆる寓意的解釈とは一線を画して、聖書のテキスト自体を典拠に聖書を解釈するという、ある意味で近代の聖書学に通ずる態度を根本に据えたものだったとする。このことを著者は、『ケルソス駁論』(出村氏自身の邦訳が刊行されている)、『諸原理について』『ヨハネ福音書註解』等、オリゲネスの最重要作品を主題材に、入念にかつ説得力をもって論証している。

その際、論の中心に置かれるのは、オリゲネスの異端的教説の一つとされた魂の復活をめぐる議論である。死者の復活の思想は、ケルソスら広義のプラトニズムに属するキリスト教批判者には到底受け入れがたいものだったが、一方、当時のキリスト教界の主流は、キリスト仮現論への抵抗もあって、肉体の甦りを物質主義的に解する傾向にあった。この両者の狭間でオリゲネスは、当時はあまり重視されていなかったパウロのテキストに依拠して、復活を「より善いものへの変化(*metabolē epi to beltion*)」という言い方で捉え、魂がこの世の肉体よりもさらに善い身体性を帯びる終末論的な様態変化と把握する。氏はここに、神的世界の永遠不動性を範型に魂の本質的な変化を認めないギリシア思想とは異なって、「変化する」ことを肯定的にとらえるヘブライ的ないし聖書的な思考を見抜いている。氏の研究が、具体的な釈義論争に密着しつつも、射程の広い宗教哲学的洞察に導かれたものであることが見て取れる。

以上の中心的論点の他にも、本論文にはいくつもの啓発的な知見が提出されている。それらは総じて、オリゲネスの著述活動を時代的・地域的文脈に置いて理解するという氏の方法論に由来する。この観点の導入によって、『ケルソス駁論』が二～三世紀のアレクサンドリアにおける諸宗教の競合状況のさなかで、専らキリスト教内部の信徒に向けて書かれた護教的性格のものだったこと、名高い『ヘクサプラ(六欄対訳聖書)』編纂がヘブライ語聖書の正文を巡るユダヤ教との対決的状况を背景にしていたことが主張される。また、後世の異端宣告が、三～四世紀のいわゆる砂漠の修道士たちのオリゲネス称揚と、ローマ帝国のキリスト教化に伴う宗教的多元性の消滅という状況下で、オリゲネスの多面的な議論が危険視されていった結果であることが、エピファニオス(四世紀)の『パナリオン』等におけるオリゲネス批判テキストの分析によって具体的に示されている。

このように本論文は、古代キリスト教世界の動向についての該博な知識、原典の精密な読解、また内外の最新の研究動向への広い目配りに基いて、宗教研究を巡る現代的問題関心を背景にしてオリゲネスの宗教思想の特質をくっきりと取り出すことに成功しており、現代日本における教父研究の高い水準を示すものとなっている。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。